

夕暮れ時、町の交流センター前に広がるにぎわい広場は、活気と笑い声に包まれていた。空がほんのりオレンジ色に染まり、浅間山のシルエットがくっきりと浮かび上がる中、花火の準備が進められていた。

20代の男性、タクヤは友人のケンジと一緒に、カフェのテラスで暗くなるのを待っていた。タクヤはカメラが好きで、ケンジもその趣味に付き合ってくれる。二人は写真を撮るため、少しでも良いアングルを探して、広場を歩き回った。「あの角度から浅間山と花火が撮れたら、完璧だな」とタクヤが呟くと、ケンジは笑いながら、「それを待つのか、暗くなるまで」と言った。二人はお互いに無言でカメラを構え、少しずつ時間が過ぎていった。

その頃、広場の一角では、40代の女性、ナオコが子供たちと一緒にキッチンカーで食べ物を買っていた。夫は交流センター内で仕事をしているため、ナオコと子どもたちだけが、屋台で賑わう広場を楽しんでいた。「これ、美味しそう!」と子どもたちが笑顔で言いながら、ケバブを手にする。その姿に、周囲の人々も微笑みかける。「夜の花火が楽しみね」とナオコは言うと、子どもたちは目を輝かせて頷いた。

近くでは、70代の地元住民、シゲさんがビールを片手にツマミをつまんでいた。おそらく一日の疲れを癒すように、彼は静かな笑顔を浮かべながら、花火の準備を見守っている。「もうすぐだな、花火が」と言いながら、シゲさんは、広場の中心に集まった人々を見渡した。町の人々が一堂に会し、気持ちを共有する瞬間。シゲさんにとって、この時間は、何よりも贅沢なひとときだった。

その裏手の駐車場では、60代の男性、タケシがマイカーを停めていた。仲間と待ち合わせのため、ゆっくりとカフェに向かう途中だ。広場を横切ると、縁日や出店の賑やかな音が耳に届く。タケシは、仲間と花火を見てから、軽井沢の居酒屋でお酒を飲み、代行を呼んで帰る予定だ。「今夜は楽しく飲めそうだな」と、少し先の花火の打ち上げを心待ちにしていた。

その一角で、役場の職員、50代の女性、ミドリさんは同僚と一緒に待ち合わせをしていた。彼女も花火を見たいのだが、その前に、広場で出店を巡るのが楽しみだった。「あの焼き鳥、美味しそう」と言いながら、ミドリさんは同僚と笑顔で歩き、花火が始まる前に軽くお腹を満たすことにした。彼女は、2階の中庭から見る花火を楽しみにしていた。

広場の片隅にある福祉マルシェでは、70代の女性、ケイコさんが商品を見て回っていた。彼女は、毎年このイベントを楽しみにしている地元の住民だ。お茶を飲みながら、手作りの品々に興味津々で触れ、近所の人々と軽く挨拶を交わす。「今年も良い物が揃ってるわね」と、ケイコさんは笑顔でお店の人と話していた。

その時、少し離れたところで観光客の女性、アヤさんがハルニレテラスに向かう道中、緑のオープンスペースでキッチンカーのケバブを食べている人々を見かけた。「ここ、いい雰囲気ね」と立ち寄ると、周りには地元の人々や観光客が集まり、楽しそうに食べ物を買っている。アヤさんも少し歩いてみたくなり、足を止めた。

空が闇に包まれ、いよいよ花火が打ち上げられた。広場のすべての人々が、手を止め、空を見上げていた。花火の明かりが顔に映り、微笑みと興奮が広がっていく。タクヤはカメラを構え、シャッターを切りながら、「完璧だ」と呟く。ナオコの子どもたちも目を輝かせ、シゲさんはビールを軽く傾けながら、静かにその瞬間を楽しんでいた。

そして、広場には町の人々の温かなつながりと、星空の下で花火が織りなす情感が溶け合っていた。

Ⅱ B案 手続きで町役場に訪れた後、次の予定まで少し時間がある昼下がり

新しくなった軽井沢町役場は、役所らしからぬ温かみのある建物だった。木の香りがほのかに漂い、窓の向こうには浅間山がやさしくそびえている。

陽が傾き始めた昼下がり、高校生の美咲は、母の手続きが終わるのを待つため、2階の学習スペースに腰を下ろした。今日はこのあと母とアウトレットで待ち合わせる予定だ。静かな空間でノートを広げると、階下からふとピアノの音が聞こえてきた。

「…あれ、朋子さん？」

1階のオープンスペース。そこでは近所の朋子さんがカフェラテを片手にピアノの方へ顔を向けていた。美咲は宿題に一区切りつけて、ふらりと階段を降りる。

「美咲ちゃん、手続き？」

「うん、ママが。私は宿題してたの。でも、ピアノが聞こえてきて…朋子さん、聴いてたんですね」

朋子は頷き、カップを少し持ち上げた。「偶然ね。なんの曲かわからないけど、いい音ね。ちょっと昔を思い出したわ」

「朋子さん、ピアノ弾けるんですよね？」

「昔はね。今は聴く専門よ。…でも、この子が弾いてる姿見てたら、また弾きたくなってきた」

笑い合うふたりのそばを、70代の岡村が仲間と一緒に軽井沢ゼミの打ち合わせをしていた。子ども向けの自然体験ゼミについて熱く語っている。美咲は興味深そうに視線を向けた。

「ゼミって、町の人やるんですね」

「そう。ああいうのに参加するとね、軽井沢のことがもっと好きになるわよ」と朋子が答えた。

そこへ、役場から出てきた美咲の母が手を振る。予定の時間だ。

「行ってくるね、朋子さん。また今度お話しようね」

「うん、気をつけて。…買いすぎないようにね！」

美咲が笑いながら去っていくと、朋子はもう一度ピアノに目をやる。その音に静かに耳を澄ませながら、隣の席で読書する年配の夫婦、展示スペースで浅間山の自然に見入る青年、そして病院からやってきた車椅子の男性――。

それぞれが、それぞれの時間を過ごす町役場という名のひとつの家。
ひとつの旋律が、人々の心をふんわりと繋いでいた。

【C案】せっかくの休日なのに一日中雨予報の日

町の朝は、しとしとと降り続く雨音で始まった。せっかくの休日なのに、空は分厚い雲に覆われ、外に出る気分にはなれない。だが、町役場と交流センターが一体となった複合施設のガラス張りのエントランスには、ぽつぽつと人影が集まり始めていた。

60代の女性、佐藤さんは、家でじっとしているのが苦手だった。傘を差して庁舎に向かい、ロビーのカフェスペースに腰を下ろす。窓の外には、雨に濡れた緑がしっとりと輝いている。無料WiFiで孫の写真を眺めながら、無料のコーヒーを一口。静かな時間が流れる。

一方、交流センターの多目的ホールでは、大学生の健太が映画上映会に参加していた。彼は最近この町に引っ越してきたばかり。知り合いも少ないが、こうしたイベントで少しずつ顔見知りが増えてきた。上映後、隣に座っていた観光客の中村さんと自然に会話が弾む。「雨の日でも、こうして町の人と交流できるのはいいですね」と中村さんが微笑む。

その頃、30代の母親、由美は、元気いっぱいの娘を連れて施設内の工作室へ。外の公園で遊ぶ予定だったが、雨のせいで急遽予定変更だ。工作室では親子で参加できるワークショップが開かれており、娘は夢中で紙細工を作っている。由美はその様子を見守りながら、カフェでほっと一息つく。

カフェの隣の読書スペースでは、40代の父親と息子が並んで本を読んでいた。親子ワークショップを終えたばかりで、次は講堂で開催されている音楽イベントに飛び入り参加するつもりだ。父親は「こんな雨の日も、家族で一日中楽しめる場所があるのはありがたい」と心から思う。

ふと、ロビーのソファで新聞を読んでいた70代の男性、田中さんが顔を上げる。普段は雨の日に外出しないが、今日は孫に誘われてやってきた。孫は今、交流センターのスタジオで若者たちと音楽を楽しんでいる。田中さんは、賑やかな声や笑い声を遠くに聞きながら、静かに目を細めた。

雨の休日。町役場と交流センターは、世代も立場も異なる人々が、それぞれの時間を過ごし、時に交わり、心地よい温もりを分かち合う場所となっていた。外の雨音が、まるでこの町の人々の心を優しく包み込むように響いていた。

9月下旬の夕暮れ時、少し肌寒い風が浅間山麓の複合施設を包み込む。町役場と交流センターが一体化した広場には、夕焼けに染まる空を背に、さまざまな人々の笑顔が集う。

オープンスペースのキッチンカーには、70代の父・浩二さんが40代の息子・直樹さん、そして二十歳になったばかりの孫・翼くんと並んで腰掛けていた。三世代で交わす「今日はどうだった？」の問いかけに、翼くんが大学の友人とのサークル活動を楽しそうに語る。直樹さんは父の注いだ冷えたビールを一息に飲み干し、浩二さんは瓶詰めの日本酒を口に含みながら、「この景色が昔から変わらないのがいいな」と唇の端を緩めた。

柔らかなイルミネーションに照らされたカフェには、役所職員の彩子さん（40代）が仕事帰りに親友の美咲さんと腰を据えている。ショーケース越しに並ぶ季節の栗ケーキとコーヒーの香りに包まれ、書類のことを忘れては笑い転げるひととき。つい先ほどまで窓口対応に追われていた彩子さんは、「この時間があるからまた明日頑張れる」と静かに頷いた。

一方、交流センター2階のサークル室では、60代の恵美子さんが友人たちと陶芸の作品を仕上げたあと、屋外テラスでストレッチを始める。浅間山を望みながらの散策は、「健康寿命を延ばす秘訣です」と冗談を交えつつ、一步一步を大切に踏みしめる。

グラウンドでは30代の健太さんが母・由紀子さんと合流。由紀子さんはヨガマットの上で深呼吸を繰り返し、健太さんは友人たちとフットサルボールをパスし合う。親子の距離感と友人との連帯感が、不思議と同じリズムを生み出していた。

夕闇が深まるころ、共有オフィスの窓からは20代の拓海さんの打ち合わせ声が漏れる。副業の企画書をめくりながら、「この場所がなければ思いつかなかった」と笑みを浮かべる姿が、まだ明かりを消さない窓の向こう側に映っていた。

それぞれの物語を紡ぎながら、複合施設にはほのかな交流のざわめきが満ちていく。仕事も趣味も世代も越え、浅間山に背を預けたこの場所で、新たなつながりが生まれる瞬間を、誰もが心のアルバムにそっと刻み込んでいた。

役場のガラス張りのロビーに、強い日差しが反射してきらめいている。外は35度を超える酷暑。まちの複合施設は、その涼しさと静けさを求めて、今日もさまざまな人でにぎわっていた。冷房のきいたカフェの窓際で、40代の女性がアイスコーヒーを飲みながら、タブレットに目を落としていた。午前中の病院の検診が思いのほか早く終わり、ふと立ち寄った展示スペースに引き込まれた後、そのままここで午後の資料作成を進めているのだ。展示は「わたしたちの町の100年」と題された、写真と語りでつづる記録。懐かしい白黒写真に混じって、彼女の祖父らしい人物の姿もあった。

その背後のテーブルでは、10代の女子学生がノートと参考書を広げている。「図書館より、ここが一番落ち着くんだよね」と彼女は、カフェのスタッフと親しげに話す。地域の「学びサポートプロジェクト」に参加しており、今日は午後から近くの中学生に勉強を教える予定だという。

中庭では、小学生たちのはしゃぐ声が水しぶきと一緒に上がっていた。噴水型の遊び場は、夏限定の人気スポット。子どもたちは水鉄砲を持って追いかけっこをし、大人たちは木陰のベンチで笑顔を浮かべながら見守っている。

その一角、待ち合わせをしていた50代の夫婦が涼しげに立ち話をしていた。ご主人はこれから陶芸の教室に向かうという。妻は午後のコーラス練習までの時間つぶしだと笑った。

ホールでは中学生の男の子たちが、最新のeスポーツイベントに夢中になっていた。ヘッドホンをつけた少年の目は真剣そのもの。その様子を、数列後ろから70代の男性が静かに見守っている。彼は午前中に工作室で軽井沢彫に打ち込み、今は冷たい麦茶を手にしながら、次の作品のヒントを探していた。

その男性がふと視線を向けると、ロビーの一角で、カフェにいた女性が誰かと電話をしていた。「そう、来週の町づくり会議の件なんだけど…」と話す声には、どこか誇りがにじんでいた。

まちの機能がぎゅっと詰まったこの施設は、誰にとっても「特別じゃないけれど、心地よい日常」を運んでくれる場所。

蝉の声が遠くで鳴いていた。施設の屋根の下には、夏の匂いと、未来への静かな期待が、確かに息づいていた。

Ⅰ F案 雪がシンシンと降り積もる平日の午後

薄その様子を見守る50代の女性は、カフェコーナーで雪見の茶会を開いていた。湯気の立つお茶を手に、浅間山を背景にした雪景色を静かに味わう。隣の席では、20代の女性が雪合戦の後の疲れを癒やし、温かいココアをすすっていた。

一方、広場では50代の男性が愛犬とともに雪の中を歩き回り、犬は嬉しそうに駆け回る。やがてカフェに戻り、窓越しに雪を眺めながらコーヒーで手を温めた。「こんなに降るとは…家に帰れるだろうか」と、もう一人の50代男性が心配そうに呟く。だが、交流センターの暖かさと人々の賑わいに、少しだけ不安が和らいだ。

70代の男性は、館内のゲームコーナーで新たな友人たちと笑い合い、交流の輪を広げていた。70代の女性は、外にもっと安全に雪遊びができる場所があればと願いながら、子供たちのはしゃぐ声に耳を傾ける。

大学生の男性は、車を止めて雪景色の写真を撮り、SNSに「町の冬、最高」と投稿した。30代の女性は、カフェの片隅でパソコンを開き、テレワークをしながら時折窓の外に目をやる。高校生の男子は、受験勉強の合間に役場の静かなスペースで気分転換をしていた。

中庭の屋外用ヒーターのそばでは、フィリピン出身の30代男性が庇の下で軽井沢コーヒーを片手に、異国の雪景色をしみじみと味わっている。入院患者は病院の窓から浅間山と雪のコントラストを眺め、「またあの場所に行きたい」と静かに願った。

それぞれの人生、それぞれの想いが、雪の降る午後にそっと重なり合う。交流センターの温もりと、窓の外の白い世界。その間に流れる静かな時間が、町の人々の心をやさしく包み込んでいた。